

平成9年、遠洋練習航海部隊講和（高松宮）

（佐々木注） 1997年4月11日作成

原題「遠航(9年、高松宮)」原文はB5版2ページ。

以下、原文をそのままA4版に変換し、欄外にページを付したものを。

遠航（9年、高松宮）

今日は、皆さんが妃殿下にお招きを頂いた有り難い日でありますので、高松宮殿下のお人柄を偲ぶお話を二つしたいと思います。

初めの話は、阿川さんが紹介しておられますのでお読みになった人もあるかもしれません。話の出所は今の橋本総理大臣で、彼が厚生政務次官であった昭和46年、高松宮殿下のお供をして硫黄島の遺骨採集現場に参ったときはなしです。ちょうど新しく発見され、まだ整理のすんでいない洞窟があり、それをまずありのままに見て頂くことになりました。米軍が火炎放射器を使い、奥へ逃げ込む日本兵をブルトナーで生き埋めにしようとしたため、窒息死した日本兵の遺骨が入り口周辺に折り重なり積み重なっていました。何の予備知識もなくその洞窟の前に立たれた殿下は、一目ご覧になるなりハッと息を詰められ、やがて地べたに正座されて両手をつき首を垂れ、じっと瞑想状態に入られました。きっと深い祈りをお捧げになったことでしょう。

同行の厚生大臣以下誰もが電気をかけられたように、ただ後ろに立ち尽くしました。どれだけか大変長く思われる時間がたち、一言も言われずに立ち上がられた殿下を皆で整理の終わった次の壕に案内しました。収集し残した遺骨の小片があちらこちらに散らばっていました。先導のものに続いて洞窟内に入りかけられた殿下は、つと靴を脱がれ靴下を外し素足になられて、それから壕内を視察されました。それまではやむを得ないこととして骨を靴で踏んで歩くのが普通になっており、素足で壕に入った人はなかったと言うことです。

戦後の日本は、物質的繁栄を追求するのに急なあまり、人間のよって立つ精神的基盤の大切さを無視してきた憾みがあるように思います。今日の平和と繁栄を築くため一身を捧げられた多くの英霊に対する感謝と崇敬の気持ちを培わなかったこともその一つです。高松宮殿下が自ら身を以てお示しになられた此の戦没者に対する敬虔なお姿は、国家国民のため身をなげうって護国の神となられた方々に対する心からのお悲しみとそして慰霊顕彰のお気持ちが、自ずから迸ったものと拝察し、感激に耐えないところであります。

どうか皆さんも、此の殿下のお心を体して、靖国神社や千鳥が淵墓苑は勿論のこと、各国の無名戦士のお墓に対しても、心からの祈りを捧げ、自らの誓いを新たにすよすがにして頂きたいものです。

二番目の話に移りましょう。兵学校最後の卒業生で海上自衛隊に入り、海將補、2護群司令で退職した西野高行という人がいます。高は高い低いの高、行は行動とか行軍とかの行くという字です。

昭和50年、この人が「香取」の艦長のととき、高松宮殿下が練習艦隊においでになり、非公

式に拝謁してお言葉を賜る機会がありました。彼は以前から殿下に対して特別に崇敬の思いをもち、このような機会を久しく待ち望んでいたのです。それは、彼がお父さんから自分の名前の由来を聞かされ、へその緒を包んだ紙にも、同じことが書かれていたからであります。彼が生まれたのは大正15年2月、山口でした。たまたまその当時高松宮殿下は、軍艦扶桑乗組みで、艦隊の内海行動中山口においでになる機会がありました。西野君のお父さんは、生まれたばかりの彼を抱いて沿道でお迎え申し上げ、その感激から高松宮の高と行啓の行をとって子供を名付けたのです。その由来を聞かされて育った西野君が殿下に対し格別の思いを持ったのに不思議はありません。

「香取」の艦上で殿下をお迎えした西野艦長は、御懇談の折りを見て「私の名前は殿下から頂いたものございます」と申し上げました。殿下は「詰まらぬ名前を付けたものだな」と仰せになった後で「一度ゆっくり話に来い」と続けられ、やがて西野艦長は御殿に招かれて詳しく経緯を申し上げる機会を与えられました。彼が今日に至るまでその感激を忘れられないのは当然でしょう。

此の殿下の「詰まらぬ名前を付けたものだな」とのお言葉に、私は今は亡き殿下のほのぼのとしたお人柄がよく現れているように拝察するのです。お日記を拝見しても随所に現れているように、ノブレスオブリージのお気持ちを格別強くお持ちであった反面特別扱いされるのを殊の外嫌われた殿下は、ご自分にちなんで名前が付けられたことに面はゆいというか、いわゆるテレるような思いを抱かれたことでしょうか。そしてそれをユーモアのセンスで茶化すように詰まらぬ名前と表現されたのではないのでしょうか。同時に西野艦長がその名前に誇りを持ちひたむきな気持ちであることを汲み取られて、御殿にお招きになる思いやり、ここに殿下の目下の人に対する溢れるようなご慈愛の迸りを拝察する次第です。目下刊行中の「高松宮日記」には、このような殿下のお人柄があちらこちらにちりばめられてあり、今更のように殿下をおしのび申し上げることで。